

せつしゆうがっぼうがっじ

摂州合邦辻

〔解説〕

安永二年（一七三三）北堀江座初演。菅専助（すがせんすけ）、若竹笛（わかたけふみえ）の合作。謡曲の「弱法師」（よろぼし）、説教節及び古浄瑠璃の「しんとく丸」などの説話を主材にし、継母が継子に恋をするという「愛護若」（あいごのわか）の筋を加えました。戯曲では玉手の恋は偽りという事になっていますが、近代的解釈では継母といってもまだ若い（十九か二十）玉手が、俊徳丸の体内に自分の血を入れることによって、恋を成就せるといふ、屈折した心理表現とされています。

〔あらすじ〕

合邦は大阪天王寺西門の近くに住む坊主。娘のお辻は、高安通俊という公卿に仕えていましたが、奥方の死後、後妻となり玉手御前と呼ばれています。通俊には、妾の子次郎丸と先妻の子俊徳丸がおり、二人とも玉手にとつては継子です。次郎丸は年長でしたが、正妻の子でないため、跡継ぎになれず、それを怨んで俊徳丸暗殺を企てます。そんな中、玉手は俊徳丸に恋心を打ち明けるのですが、拒絶されてしまいます。叶わぬ恋を怨んだ玉手は俊徳丸に毒をもち、病気にかからせてしまいます。

病のため目も見えず醜い姿となつてしまつた俊徳丸は、家出をして天王寺近くの小屋にいます。そこへ許嫁の浅香姫が尋ねてきますが、次郎丸一味に襲われかけ、合邦に救われます。二人はその庵室に身を寄せることになりました。

〈合邦庵室の段〉

合邦のもとへ玉手がやつてきます、妻の説得もあり、娘を家に入れ、俊徳丸の事はあきらめるように言い聞かせるのですが、玉手は承知しません。様子をきいていた俊徳丸と浅香姫は逃げようとしませんが、それに気づいた玉手は、嫉妬に狂つて襲いかかります。たまりかねた合邦は娘を刺してしまいます。

苦しい息の中で本心を打ち明ける玉手。実は俊徳丸に心にもない恋を仕掛けたのは、次郎丸一味から難を逃れさせるため、自分の生き血を飲ませると俊徳丸の病が治る事を告白するのです。事実を知つた合邦たちは嘆き悲しみます。玉手の血を飲んだ俊徳丸は元の姿にもどり、玉手は静かに息を引き取ります。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

合邦庵室の段

しんたる夜の道、恋の道には暗からねども、気は
烏羽玉の玉手御前、俊徳丸の御行方、尋ねかねつゝ
人目をも、忍びかねたる頬かむり包み隠せし親里も
今は心の頼みにて馴れし故郷の門の口、立寄る跡よ
り入平が、ご両所の御行方こゝとは聞けど奥方の、
姿見るより様子もと、戸脇に厚き藪畳、身をひそめ
てぞ窺ひみる。かくとは知らず玉手御前、干割ひわれに洩
るゝ細き声、

「母様〜」

と呼ぶは確かに娘の声、

「ヤアわりやまだ死なぬか、殺さりやせぬか」

と、立上りしが心付き、振り返り見る女房の方、鉦かね

に紛れて聞えぬは、『これ幸ひ』とそ知らぬ顔、

「母様〜こゝ明けて」

と、叩く戸の音聞き咎め

「合邦殿、今こな様は何とぞ云うてか」

「ア、イ、ヤ何とも云やせぬ、そりや空耳であるぞ
いの」

「イヤ空耳かは知らねども、ちらりと聞えた娘が声、
ハテ合点のいかぬ」

と立上る、

「さうおっしゃるは母様か、ちやつと明けて下さん
せ、辻でござんす戻りました」

と、聞いてびつくり、

「ヤア戻ったとは夢ではないか、健まめであつたか嬉し
や」

と、駈出る裾を取つて引止め

「ヤイ〜、うろたへ者、肌は触れても触れい

でも、わが子に不義をしかけた畜生、侍の身で高安

殿が、助け置かしやる様なければ、何の今まで存ながらへ

て、うか／＼こゝへ何しに來うぞい、隠すより顯は

るゝはなし、親はないと云はしても、ある事知つて、

娘が手から度々の合力金ごつりよくたん、二人が命を養ふたは、み

な高安殿のご厚恩、サ、サ、その夫の目を掠め、畜生

の心さげた娘、たとへ無事で戻つたとて、門端も踏

まされうか、もとより娘は斬られて死んだ、が今も

の云うたが娘なりや、それこそ幽霊、そなた気味が

悪うはないか、肉縁の深いほど死人になれば怖いも

の、必ず門の戸明けまいぞ」

と、云ふに女房は、

「イヤ／＼／＼、幽霊はおろか狐狸の化けたのでも、

ま一度見たい娘が顔、もしや恐しいものであつて、

目を廻して死んだら仕合せ、いとし可愛い子を先立

て、生きて業をさらさうより、一目見たい」

と振り切るをなほ引止めて

「ハテさてマ悪い合点、狐狸か幽霊なればまだしも、

もし誠の娘なら、高安殿へ義理の云訳、以前は刀を

差いた役、親の手にかけ殺さにやならぬ、サ、サ、そ

れが嫌さに止めるのぢや」

と、泣かねど親の慈悲心を、聞く子や妻はうちと外、

顔と顔とは隔たれど、心の隔て泣き寄りの、親身の

誠ぞ哀れなる、娘は涙押拭ひ、門の戸口に口を寄せ、

「父様のお腹立ち、お憎しみはご尤も、これにはだ

ん／＼云訳あれど人目を忍ぶこの身の上、マアこゝ

明けて下さんせ」

と、泣く／＼願へば母親は、

「アレ聞いてか合邦殿、云訳があるといの、マ、

マ、マ、マア聞いてやつて下さんせ、ハテ娘と思へ

ば義理も欠ける、が幽霊をうちへ入れるに、誰に遠慮もあるまいぞえ」

「ム、いかさまなうこの世を離れた者なれば世間を憚ることもないかい、そんなら早う呼び込んで、茶漬でも手向けてやりや、ア、可哀や立寄るところはなし、幽霊もさぞひだるかる」

と、身を背けるは泣く百倍、母は悦び門口の疾しや遅しと開く間も、

「お懐しや」

「懐しや」

と、緇る娘の顔形、前うしろ見つ肌を手を、入れてもやっぱりほんの娘、

「嬉しや健でゐたかいの、さうとは知らいで逆様事、あた忌々しい百萬遍、弔ひした夜に無事な顔、ひよつと夢ではあるまいか」

と、抱きしめ／＼嬉し泣き、父もほど経る娘が顔、見たさに思はず立寄れど、以前の詞と世の義理を、思へばちやつと飛び退いて、手持ち悪ぞいぢらしき。

母はやう／＼心を沈め、

「世間の噂にはの、そなたはアノ俊徳様とやらに恋をして、館を抜けて出やつたのイヤ不義ぢやのと悪う云へど、そなたに限りよもや／＼さう云ふことはあるまいの、コリヤアノ嘘である嘘である、才ホ、ホ、ホ、嘘か／＼」

と箸持つてくゝめるやうな母の慈悲、一面映ゆげなる玉手御前、

「母様のお詞なれどいかなる過去の因縁やら、俊徳様の御事は寝た間も忘れず恋ひ焦れ、思ひ余つて打ちつけに、云うても親子の道を立て、つれない返事堅いほどなほいやまさる恋の淵、いつそ沈まばどこ

までもと、後を慕うて歩はだし、芦の浦々難波湯、身を尽くしたる心根を、不憫と思うてともくくに、俊徳様の行方を尋ね、女夫にして下さんすが、親のお慈悲」

と手を合はせ、拝み廻れば母親も、今さら呆れわが子の顔、ただ打守るばかりなり、父はとかうの詞なく、納戸のうちより昔の一腰引さげ出で、

「ヤイ畜生め、おのれにはまだ話さねど、もとおれ

が親は青砥左衛門藤綱あおとというてナ、鎌倉の最明寺さいみょうじ時

頼公の見出しに合うて天下の政道を預かり、武士の

鑑かがみと云はれた人ぢやわい、おれが代になつても親の

蔭、大名の数にも入つたれど、今の相模入道殿の世

になつて、佞人どもに讒言ざんげんしられ、浪人して二十余

年、世を見限つての捨て坊主、この形になつてもナ、

親の譲りの廉直を立て通した合邦が子に、マようも

くおのれがやうな女子の道も、人の道も、むちやくちな娘を持つたと思へば、無念で身節がエイ砕けるわい、ガまた高安殿が今日まで、うぬを助けて置かつしやるご心底を推量するに、もとおのれは先奥方の腰元、後の奥方に引上げうとあつた時、たつて辞退しをつたを、心の正直懇望で無理やりに奥方姿なり、ア、手をかけず奥様とも云はさずば、今この仕儀にも及ぶまい、殺さにやならぬやうになつたも、みなわが業とお身の上を省みて、親への義理に助けさつしやるを、ア、ありがたい、恥づかしいと思ふ心が芥子けしほどでもあるなら、譬へどれほど惚れておつても、思ひ切るに切られぬといふ事はないわい、それに何ぢや、そのさまになつても、まだ俊徳様と女夫になりたい、親の慈悲に尋ねてくれとは、ドゞゞゞどの頬げたで吐かした、エゞあつちから

義理立てゝ助けて置かしやるほど、生けて置いてはこつちもまた義理が立たぬ、サ覚悟せい、ぶち放す」

と、はや抜きかくる刀の鯉口、母は取り付き、

「コレ合邦殿、ソリヤ了簡が違うた、お慈悲で

助けて下さる娘、お志を無足にして、殺して義理が立ちますか、ハテこの上は随分と意見して、俊徳様の事思ひ切らし、命の替りに尼法師、いかなる科の囚人も助かるは衣の徳、浮世を捨つれば死んだも同然、どこへの義理も立つ道理」

と、奥へ指差しさま／＼となだめすかして母親は、

わが子の膝に膝すり寄せ、

「モ聞きやる通りの様子なれば、どのやうに思やつても、そなたの恋は叶はぬほどにの、ふつつりと思ひ諦めて、はやう尼になつても、十九や二十の年輩で、器量発明優れた娘、尼になれと勧めるは、マド

んな心であるぞいの、コレ助けたいばかりに花の盛りを捨てさせて、かゝれとてしも黒髪の、百筋千筋と撫でしもの、剃らねばならぬこの仕儀は、何の因果」

とばかりにて縋り付いて、泣きゐたる、娘は飛び退き顔色変へ、

「エゝわつけない事云はしゃんすな、わしや尼になること嫌ぢや／＼、アイ嫌でござんす、モせつかく艶よう梳き込んだこの髪が、どう酷たらしう剃られるもの、今までの屋敷風はもう置いて、これから色町風随分派手に身を持って、俊徳様に逢うたらば、あつちからも惚れて貰ふ氣、怪我にも仮りにも尼の、坊主のと云ひ出しても下さんすな」

とけんもほろろに寄せ付けず、
「さう吐かしやモウ勘忍が」

と、父が身構へ母親は、

「ヲ、道理でござんす、腹の立つは尤ぢやく、ガ
モウ半時かしいて一時、わしに預けて下さんせ、手
の裏を返すやうに、思ひ切らして見せませう、夫婦
になつて長の年月、たった一度のわしが願ひ、コレ
聞き届けて下され」

と願へば、是非も、なかの間へ、見返りもせずに行く
父親、母は意地張る娘の手、引立てく無理やり
納戸へ

こそは、入る月の、影さへ見えぬ目なし鳥、つがひ放
れず浅香姫、一間のうちより俊徳の御手を引いて忍
び出で、

「今の様子を聞くにつけ、モウしばらくもこのうち

に、お前はどうも置きまされぬ、いづくへなりとお
供せう」

と手を引立つれば俊徳丸、

「わが業満ユキミてず母上にかくまで思はれ参らすも、
身の罪障とは云ひながら、館を出でし頃には勝り両
眼盲したるその上に、かゝるけやけき姿をばお目にか
けなば母上の、愛着心は切れもやせん、案内せよ今
一度、御目にかゝつてその上に、入平も尋ね来ば召
し連れて立退かん」

と、宣のたまふ声を聞きとる門口、

「ア、イヤく、下郎めは先刻より、始終の様子承
る、このところにごさある事、里人の噂に聞けば、も
し敵方へ洩れては大事、一刻もはやくお供せん」
と、気を急ぐ折しも駈出る玉手

「ナウ懐かしや俊徳様、お前に逢はふばっかりに幾

瀬の苦勞もの案じ、心を尽くした甲斐あつて、お健まめ
なお姿見たわいな」

と縫り給へば身をすり退き、

「へエ、情けない母上様、館にても申すごとく同氏
さへも娶らぬは君子の戒め、まして親子の仲々に恋
の色のとかほほどまで慕ひ給ふはお身ばかりか、宿業
深き俊徳にまだ／＼罪を重ねよとか、見る目いぶせ
きこの癩病、両眼盲て浅ましき姿はお目にかゝらぬ
か、これでも愛想が尽きませぬか、道も恥をも知り
給へ」

と、涙とともに恨むれど、

「オホ、／＼、オ、愚かな事をおつしやります、
そのお姿も私が業、わざむさいともうるさいとも何の思
はう思やせぬ、自らゆゑに難病に、苦しみ給ふと思
ふほどいや増す恋の種となり、一倍いとしうござん

する」

「フウこの業病を母上の、業とおつしやるその仔細
は」

「さればいな、去年霜月住吉で、神酒みきと偽り、コレこ
の鮑あわびで勧めた酒は秘方の毒酒、癩病発する奇薬の力、
中に隔てをしかけの銚子、私が呑んだは常の酒、お
前のお顔を醜うして、浅香姫に愛想尽かさせ、わが
身の恋を叶へうため、前世の悪業消滅と、家出あり
しはヲ、よい幸ひ、後を慕うて知らぬ道、お行方尋
ぬるそのうちも君が形見とこの盃肌身離さず抱締め
て、いつか鮑の片思ひ、つれないわいな」

と御膝に、身を投伏してくどき泣き、様子を聞いて
俊徳丸、無念と思せど義理の親、恨みも云はれずと
にかくに、わが身の不運と御落涙、姫はいつそ涙も
出でず、腹立ち紛れとつて突き退け

「エ、聞けば聞くほどあんまりぢや〜、あんまりじゃわいな、玉をのべたお姿をようあのやうに仕やったなう、母御の身として子に恋慕、人間とは思はねど、道ならぬ事もほどがあるわいな、サア〜、元のお顔にして返しや」

と、恨みあまりてはしたなき、玉手はすつくと立ち上り、

「ヤア恋路の闇に迷うたわが身、道も法も聞く耳持ため、モウこの上は俊徳様いづくへなりとも連れ退いて、恋の一念通さで置かうか邪魔しやったら蹴殺す」

と、飛びかゝって俊徳の御手を取って引立つる、

「ア、ラ穢けがらはし」

と振り切るを、離れじ遣らじと追ひ廻し、支へる姫を踏み退け蹴退け、怒る目元は薄紅梅、逆立つ髪は

青柳の姿も乱るゝ嫉妬の乱行、門には入平身に冷汗、堪こらへかねて駈出る合邦、娘がたぶさ引掴み、ぐつと差込む氷の切先、

「あつ」

と魂消る声にびっくり戸をめり〜、駈込む入平驚くご夫婦、

「情けなや母上を手にかけてしか」

と御涙、娘を抱へる母親は、

「心からとは云ひながら、ヲ、術すべなかる苦しかる術なかる苦しかる術なかる」

と歎けば、今さら人々も涙々を添へにける。合邦は怒りの顔色、筋骨立てて、

「ヤアみな何のためにその涙、ナ、何吠えるのぢや女房ども、われ泣いてはナ左衛門様や、俊徳様ご夫婦へ、心の義理が立つまいがな、このやうな念の入

つた大悪人を、まだおのりや子ぢやと思ふかい、おりやもう／＼憎うて／＼どうもかうもたまらぬゆゑ、このかたのみ

十年以来蚤一匹殺さぬ手で現在の子を殺すも、とつとモウ浮世の義理とは云ひながら、これが坊主のあらう事かい／＼これが坊主の／＼／＼あらう事かいなあ、コリヤヤイコリヤ、おのればかりかこの親まで、私の教へを背かして、無間地獄の釜焦げに、よう仕をつたなウヌ、魔王め」

と、ゑぐる拳を手負は押へ、

「フ、道理でござんす道理ぢや／＼憎い筈ぢや、ガこれには深い様子のある事、物語るうちこの刀、必ず抜いて下さんすなエ」

と苦しき息をほつと継ぎ、

「様子といふは他でもなく、げしやうはら外威腹の次郎丸様、年

かさに生れながら、後に生れた俊徳様に、家督継が

すを無念に思ひ、つばいへいま壺井平馬と心を合はし御世継ぎの

俊徳様を、殺さうといふかねての企み、推量ばかりかくわ委しい様子、立聞きしてヤ南無三宝、義理ある仲のお子といひ元は主人の若殿様、殺させては道立たず、この上は俊徳様ご家督さへお継ぎなくば、次郎丸様の悪心も自然と止んで、お命に別条ないと、思案を極め、心にもない不義いたづら、云ふもうるさや穢らはしい、妹背の固めと毒酒をすゝめ、難病に苦しめたはな、お命助けうばかりの手立て、恋でないとの云訳は、身をも放さぬこの盃、母の心子は知らぬ片思ひといふ心の誓ひ、継子継母の義は立つても、さぞやわがつまぢとし夫通俊様、根が賤しい女ゆゑ見損うたいたずら者とおさげしみを受けるのが、よみじ黄泉の障りになるわいの」

と、云へど合邦あざ笑ひ、

「それほど知れた次郎丸が悪事、ナ、なぜ通俊様へ告げぬぞい、たった一口云ひさへすりや、癩病にする事も不義者にもならぬわい、口利巧に云ひ廻したとて、今になってそんな暗い云訳喰ふやうな親ぢやないわい」

「イエ〜、そりや父様のご了簡違ひ、そのやうすを夫へ告げなば、道理正しい左衛門様、お怒りあつて次郎丸様、切腹かお手討は知れた事。次郎丸様も俊徳様も、私がためには同じ継子、義理ある仲に变りはない。悪人なれど殺させては先立たしやんした母御前が草葉の蔭でもさぞやお嘆き、隔てた仲ゆゑ訴人して、殺させたかと思はれては、世間も立たず、通俊様もお子の事、何のお心よからうぞ、あなたこなたを思ひ遣り、継子二人の命をば、わが身につに引受けて、不義者と云はれ悪人になつて身を果

すが、継子大切、夫のご恩、せめて報ずる百分一」と云訳聞いて人々は『さてはさうか』と疑ひの晴れるほどなほ父親は、

「コリヤヤイ娘、その心でなぜにまた俊徳様の跡追うて、家出したがム、合点がいかぬ」

「ヲ、尤なお咎めなれど、いづくまでも御行方を尋ね、あなたのお目にかゝらねば、痛はしやアノ癩病、

ご本復はござんせぬ」

と、聞いて入平不審顔、

「何とおっしゃる、お前様がお傍に付いてござれば、

ご本復なさるゝとは」

「さればの事、典薬法眼に様子を打明け、毒酒の調合頼む折から、本復の治法委しく尋ねしに、胎内より受けたる癩病ならず、毒にて発する病なれば、寅の年寅の月、寅の日寅の刻に誕生したる女の、肝の

臓の生血を取り、毒酒を盛つたる器にて病人に与へる時は、即座に本復疑ひなしと、聞いた時のその嬉しさ、それでこの盃、身に添へ持つて御行方、尋ね捜す心の割符、父様、何と疑ひは晴れましてござんすかえ」

「オイヤイ〜〜、スリヤそちが生れ月日が妙薬に合うたゆゑ、一旦は癩病らいびにしてお命助けまた身を捨て、本復さうと、それで毒酒を進ぜたな」

「アイナア」

「出かしをつた出かした〜〜〜出かした娘、モ、〜、〜、何にも云はぬ、勘忍してくれ〜〜、

日本はさておき、唐からにも天竺にも、今一人とくらべる人もない貞女を、畜生の悪人のと、憎体口云ふばかりか、親の手にかけ酷むじい最期も、ココこのおれが愚鈍なからぢや阿呆なからぢや愚鈍なからぢや阿呆

なからぢや愚鈍なからぢや阿呆なからぢや愚鈍なからぢや、赦してくれ」

とどうどゐて悔やみ、涙ぞ道理なる。始終を聞いて俊徳丸、探り寄つて継母の手を取り押載き〜、

「生さぬ仲の義を重んじ御身を捨てての御慈愛、誠の親とも命の親とも云ふにも尽きぬご厚恩、身を百千に砕くとも何と報じ尽くすべき、ありがたや忝かたじけなくや」と頭こゝろを畳に付け給へば、

「そのお心とは露知らず勿体ない道知らずとさげしんだのが恐しい、お赦しなされて下さりませ」

と、両手を合はす姫の詫び、

「あつばれ女の鑑とも云はるるお身に悪名受け、かかるご最期痛はしや」

と、姫入平も悲歎の涙、母は正体涙に暮れ、

「ほんにこの子が生れたは寅の年寅の月寅の日の寅

の刻、世間へ沙汰をせぬものと世の教へをば大事ぞと、夫婦親子のそのほかは犬猫にさへ隠したに義理にせまればわれとわが、身を責めはたる無常の寅、ひよんな月日に生れたは持つて生れた不運か」

と、歎けば道理と一座の涙、逢坂増井の名水に龍骨りゅうこ車しゃかけしごとくなり。手負は顔を振上げて、

「サア父様、この鳩尾を切り裂いて、肝の臓の生血を取り、この鮑ではやう、くく」

と気を入る娘、

「トットモ憎いと思うた張り合ひなりやこそ切りも突きもなつたもの、今では心底可愛い娘をどうマアこれが酷たらしい、ナニ若役ぢや入平殿とやら、大儀ながら頼みます」

「これはまた迷惑千万、主人の介抱お世話の御礼、モどんなご用も相勤めうが、ご主人同然の玉手様、

どこへ刃やいばが当てられませう、こればかりはネイご免くくく」

「ヤア未練な用捨、もう人頼みには及ばぬ」

と、懐剣逆手に取直せば、

「マ、マ、待つてくれく、娘、とても生きぬそちが命、臨終正念未来成仏、仏力頼む百万遍、この人数で繰る数珠の、輪の中で往生せい」

と、とりどり、広げる数珠の輪の、中に玉手は氣丈の身構へ、俊徳丸を膝元へ、右に懐剣、左に盃、外には父の親粒が、導師の役と、鉦鐘木かねしゆもく、母は涙の目も明かず、宵は死んだと思ひ子が、回向のための百万遍、今また無事なと悦んだも、露と消え行く勧めの、念仏、

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏く、南無阿弥陀仏なむあみだく南無阿弥陀仏」

うちには何なく切り裂く鳩尾、自身に血汐受けたる
盃、差付ける手もわな／＼、俊徳丸は押載き、

「母の賜物天地にもあまるばかりのご芳志」

と、ただ一口に呑みほし給へば、不思議やたちまち
両眼開け面色手足も瞬くうち、昔の姿に返り咲き花
の顔かんばせ 見る手負、苦しき片頬に笑ひ顔、

「ヤアご本復か」

と一座の悦び、はや断末魔の四苦八苦、鉦も早めて
責め念仏、

「なまいだ／＼／＼／＼／＼」

願がんにしくどく以此功德平等に死骸に取付き縋付き、悲しみ涙黍
け涙、庭に波打つばかりなり。歎きの中に母親は、
頭かしらの雪を打払ひ、娘が菩提の尼衣、俊徳君も涙をと
どめ、

「廣大無辺継母の恩、せめて少しは報ずるため、出

世の後はこの辺に一字の寺院を建立し、母の尼公を
住侶とせん、継母は貞女の鑑とも曇らぬ心は清める
江に、月を宿せし操をすぐに、月江寺と号なうくべし」
と、仰せは今も尼寺と、常念仏の鉦かねの音に昔の哀れ
や残るらん、父はつね／＼勸進の、自力他力にこの
仏体、建立してわが住家をそのまま一つの辻堂に、
営むもまた平等利益、東門中心極樂へ、娘を往生な
し給へと、願ごせふ心は後世のため、現世の名残り数々
は百八煩惱夢覚めて、涅槃ねはんの岸に浮かむ瀬と形見に
残る盃の、逆様事も善知識、仏法最初の天王寺、西門
通り一筋に、玉手の水や合邦が辻と、古跡をとどめ
けり。